

## 優しい言葉

佐藤 文香

いつか、一人の親になっても私はこのお話を大切に覚えていた。この本を読んで、作者のあたたかな心に触れたようだった。誰かに優しくなれるように、私はこの本をずっと忘れないでいたい。

「児童虐待」とは近年になって急激に増えつつある、日本の抱える問題の一つである。この本でも、虐待をする親と虐待を受ける子供の姿が描かれている。虐待をしてしまう理由は私にはわからない。なぜ罪のない子供に、本来優しく子供の頭を撫でてやるべき手をあげてしまうのか。虐待をする理由がわからないが故に、虐待イコール全て親だけが悪いという、偏見ともとれる固定観念があった。この本は、そんな考えを一蹴した。

物語には主に二組の親子が出てくる。一組は先程挙げた虐待をする親と、受ける子供、もう一組は虐待のない親子。この二人の母親はまるで対照的である。そんな二人の母親が表面上仲良くしているのが、私は理解できなかった。子供と手をつないで横に並んで歩くはなちゃんママと手をつなぐ距離をとって歩くあやね

ママ。あやねママはそんなはなちゃんママを疑っていた。あんなに子供に対して優しくなれるはずがない、と。ふと、これは物語の中に限った話ではないのではないかと思った。虐待をする親にとって、その行動は非常なことでもなんでもないのかもしれない。「これくらい、他の親もやっていることだろう」そんな考えが非行に走らせるのではないだろうか？この時点では私の固定観念が揺らぐことはなかった。しかし、彼女の疑い深い心が、とてもかわいそうなもののように感じた。彼女をここまで追いつめた原因が知りたくなって、一気に読み進めた。

娘のあやねを愛する心を欠落してしまったあやねママは家に帰ると、あやねがしてしまった小さなミスを「悪いこと」として罪をつぐなわせるかのように手をあげてしまう。虐待を受けている子供の悲痛な叫びが今にも聞こえてきそうな気がして、心が痛んだ。

彼女をこんな非情な行動に走らせたのは、彼女の母親だった。彼女もまた、虐待を受けていたのだ。だからこそ、彼女にとって虐待は、非情でも、非常でも、非行でもなかったのだろう。愛されたことがなければ愛し方もわからない。彼女があやねを上手く

愛することができないのもうなずける。

物語終盤になると、ついにはなちゃんママに虐待がばれてしま  
う。ところが、はなちゃんママは知っていた。あやねママが虐待  
をしていたことも、虐待を受けていたことも。なぜなら彼女も親  
から虐待を受けていたからだ。あれだけ対照的に書かれていた二  
人の共通点。はなちゃんママはあやねママを力強く抱きしめた。  
同じ境遇にあった二人でも、なぜこんなに対照的になってしまっ  
たのか。それははなちゃんママを虐待から唯一救ってくれたおば  
あちゃんの存在が大きいだろう。彼女が虐待を受ける度に抱きし  
めて守ってくれたのだ。そして、いつもはなちゃんママにこう言  
ってくれたのだ。「べっぴんさん」と。彼女にとって、その言葉は  
心を支えてくれる魔法の言葉だった。だからこそ、彼女も言う。「あ  
やねちゃんママもべっぴんさんなんだよ」と。

優しい言葉とは何だろう。人によって様々だろうと思う。しか  
し私はこの本を読んで思うのだ。「頑張れ」という未来に賭けるよ  
うな投げやりな言葉を一言で贈ることよりも、その人のいまをほ  
めてあげる方が、言葉を贈られた方は自信がつくのではないだろ  
うか、と。ぜひ、自信をなくしてしまった人がそばにいたなら、

たくさんほめてあげてほしい。人は誰だっていいところがある。だからこそ、それをみつけて、出しおしみせずに言っていきたいのだ。あなたの贈った優しい言葉という水がその人達の心に優しい花を咲き誇らせるから。そして今度はその人が誰かに優しい水を贈る番だ。誰もが自信をもって生きることができるよう、人からもらった優しさを伝染させて。

この作品は一度、虐待をしている親だけでなく、全ての人に読んでほしいと思う。虐待は子供の身体だけでなく、心も深く傷つけること。でも辛いのは子供の心だけでないかもしれないということ。そんな心を優しい言葉でぜひ救ってほしいということ。生きていくことが「悪いこと」である人間はいないということ。優しさや愛は伝染していくということ…。何度も読んで、この作品が伝えたいことをたくさん読みとってほしい。

誰かに優しい言葉を贈れるように、この物語を、「べっぴんさん」という言葉を、私はずっと大切にしていこう。